

リトルドラゴン・ムーの第一話 The first book of little dragon Mu

ジェンカ、エレナ、ミゲル、ディミトリオ、エバンゲリス、ホーマー、ウェスター、アレサンドロ、シルビア、フランセスカ、シグルド、アグネス、ギンタ、バレンチナ、ルイザ、ズダフコ、エイダン、エベリン、ビングとロー、パブロ、ダニエル・ホース —— かれらの友人、両親、子供たち、孫たちのために。

ムーがヨーロッパを訪問する Mu visits Europe

リトルドラゴン・ムーは、たいへん高い山のたいへん大きな木の中で両親といっしょに暮らしていました。

ムーの皮膚（ひふ）は、うろこ状で、青緑に光っていました。翼（つばさ）は、ピンク色と虹色で、爪は、コクタンのものでした。母親のローは、皮膚が金色で、翼が紫色できれいでした。父親のビングは、りっぱな赤色の翼を持ち、きれいなまだらの皮膚をしていました。

リトルドラゴン・ムーは、優等生でした。翼を清潔に保ち、爪を切るのもみな自分でやりました。リトルドラゴン・ムーは、自分の鼻の穴から火を吹いて人間を焼いたり、山火事を起こしたりしないように教えられていました。ムーの両親は、ムーのことを誇りに思っていました。ちょっと怒ったりするのもムーが泥んこ遊びをしたときだけでした。

ムーは、毎日、緑色のスクールバスで通学しました。リトルドラゴン・ムーは、学校で友達と会うのが大好きで、「ブロントザウルス」や「サルトポスクス」、時には「ティラノザウルス」の真似をして遊びました。ムーは、ブラコンコが好きでした。翼を思いっきり羽ばたかせ、空高く飛べるからです。

リトルドラゴン・ムーは、ドラゴン語を勉強するのが好きで、きれいな読みやすい爪文字を書きました。ムーは、ドラゴン算数があまり得意ではありませんでした。時々縞（しま）とかげと大きなアオバエをごっちゃにしました。ムーは、地理が好きで、別の色のドラゴンが住んでいる他の山や海のことを勉強するのが好きでした。ムーは、とりわけ歴史が好きで、勇猛シングやモング大

王のような昔の巨大ドラゴンのことを勉強するのが好きでした。ドラゴニアを爬虫類的計略で敵から救った有名なドラゴン女史ツーのことを読みました。ムーは、いつの日かシングやモングのように強くて勇敢で、ツーのようにすばしこくて賢いドラゴンになれると思っていました。輝かしいドラゴンの将来を夢みていたのです。

ある日のこと、リトルドラゴン・ムーが大木の木の家に帰ってくると、ローとビングが荷造りをしていました。ローとビングは、ヨーロッパという遠い国に行つて1年間そこに住むことになったとムーに言いました。リトルドラゴン・ムーは、教科書を見てヨーロッパがどこにあるのか探さなければなりませんでした。ローとビングは、木の家に鍵をかけ、ドラゴン一家は、新居に向かいました。

ヨーロッパには、ドラゴン一家が住めるような大きな木は、そんなにたくさんなかったのです。家を借りました。リトルドラゴン・ムーは、今や自分自身の部屋を持ちました。それは、木の形ではなく四角形のたいへん奇妙なものでした。雨が降るとたいてい庭にぬかるみがありました。今ではローとビングは、ムーが泥んこ遊びをしても少しも怒りませんでした。なぜならムーがドラゴニアを懐かしがるのを見ることができたからです。

ヨーロッパでは、リトルドラゴン・ムーは、黄色いバスで通学しました。かれの仲間たちは、いろんな所から来ていました。ルイザとズドラフコは、ブルガリア出身で、フランセスカとアレサンドロとシルビヤは、ピサ出身です。ミゲルとエレナは、スペインとベルギーとルッカ（イタリア北西部の地名）の血がちょっとずつ入っています。イレンカは、ポーランドとドイツとグルジョアの血が混じっています。シギーは、アイスランド生まれでした。ディミトリスは、ギリシャ出身で、エイダン、アイルランド出身です。かれらはどうやってお互いに理解し合えるのでしょうか？

リトルドラゴン・ムーは、地理の授業を一生懸命勉強しなければなりませんでした。梨とりんごの足算を勉強しなければなりませんでした。またも時々梨とりんごがごっちゃになりました。

ムーは、新しい文字と言葉を勉強しなければなりませんでした。そして、直ぐにかれの友だちがいろんな種類のヨーロッパ語を話していることに気づきました。ドラゴニアには、1種類のドラゴン語があるだけで、毎日、リトルドラ

ゴンたちは、先生に「ボ、キク」または「ボ、ナク」と答えました。それは、「はい、ドラゴン先生（女性）」または「はい、ドラゴン先生（男性）」という意味でした。しかし、友だちは、スィーやウィやネと言っていました。これはみな「ボ」のことでした。時には、ノーやニェトやノンやナインとも言いました。これはみな「セル」のことでした。

歴史の授業でもリトルドラゴン・ムーは、戸惑いを感じました。ヨーロッパでは、シングやモングやあの有名なツーフ女史のことを誰も知りませんでした。かれの同級生は、リチャード獅子心王、ナポレオン、ガリバルディ、コロンブス、ニャル、アルフォンソ賢王、アスパジハ、プガチョフ、クラム王のことを勉強してきていました。しかし、ムーは、これまでこの人たちの名前を誰ひとりとして聞いたことがありませんでした。

ムーは、放課後泥んこ遊びをしながら時々泣きました。ある日のこと、ムーの友だちがムーにドラゴニアのことを話してくれと頼みました。ムーは、高い山の上の木の家のことや緑色のスクールバスのことを友だちに話して聞かせました。ドラゴン語の書き方を教え、「はい」という意味の「ボ」や「いいえ」という意味の「セル」のことまで教えました。ムーは、算数の本に出てくる縞とかげや青緑色のトンボのことを話して聞かせました。シングやモングやあの有名なドラゴン女史ツーフの伝説のことを話して聞かせました。

ムーの友だちは、ドラゴニアのような遠く離れた世界があることを知ってびっくりしました。そこでは誰もナポレオンやニャルやクラム王のことを知らないのです。みんなの結論は、お互いのことを勉強するのが最善の策だろうということでした。リトルドラゴン・ムーは、ブロントザウルスやサルタポスクスの真似の仕方を友だちに教え、それから、どんな風にしてドラゴンが翼を使って遊ぶかを教えてやりました。フランセスカやイレンカやシルビヤやアレサンドロやミゲルやドミトリスやエイダンやムーのクラスメートは、みんなリトルドラゴン・ムーのように美しい強いピンク色の翼を持つてみたくなりました。

リトルドラゴン・ムーは、幸福でした。休み時間にクラス全員で「ブロントザウルス」や「カウボーイ」を真似たり、木の家作りをして遊びました。

リトルドラゴン・ムーは、自分が国に帰ったら会いに来るように友達に言いました。ローとビングは、それはたいへん良いアイデアだと思いました。

しかし、ドラゴニアに帰る前に、ドラゴン一家は、ヨーロッパの別のところでしばらく過ごすことになりました。ムーは、友だちに別れを告げ、そこに自分を訪ねてきてくれと頼みました。

二三ヶ月後、かれらはムーを訪ね、みんなたいへん楽しく過ごしました。ムー一家は、どこに行ったのでしょうか。どうしてそう思いますか。それは、リトルドラゴン・ムーの第二話になります。

あなたも第二話を書いてみませんか。